

## 授業自体が教育方法の実践となる授業運営及びカリキュラム設計の在り方

Class management by using the class itself as implementation of education method and how curriculum design should be

山崎 吉朗

### 要 旨

新しい学習指導要領では、従来の講義型の授業をアクティブラーニング、主体的・対話的で深い学びの授業に改善していくことが改革の中心となっている。教職の講義でもそれは求められる。方法論を学ぶだけでなく、講義そのものがアクティブラーニングの授業となり、受講者が授業を通してそれを体現し、学校現場に入った時に今度は指導者として実践できるような講義にしなければならない。そのように授業を構成、運営してきた。本報告ではその試行錯誤を多人数の授業でどのように実現して来たかについて報告する。

キーワード：アクティブラーニング、学びの共同体、LMS、グループ活動、教育方法

#### 1. はじめに

「80人位でしょうか、毎年。」

当たり前のように返答が帰って来た。2011年、白山(文学部)と川越(理工学部)両方の講義を担当することになり、川越の方の設備や状況の確認をした時である。

その返答が来る前に、まずは白山に行き、担当する講義の教室を見学していた。12名という受講者は随分少ないと思った後の川越からの回答だった。思わず、そんな人数でコンピュータの授業を受けられる教室があるのですかと質問したところ、「120台ありますので大丈夫です」と事も無げに回答された。

「助手はつくのでしょうか?」

「つきません。」

別の大学で担当していたコンピュータを使う「外国研究と情報科学」では、受講者が30人を超えるとTAがついていたので質問した。

ともかく翌日、川越の教室を見学に行った。2号館の第2MMという部屋である。次ページの写真と図をご覧ください。プロジェクターを投影するスクリーンの他、中間に大きなディスプレイが2台ついている。後ろの方の席からは遠くてスクリーンが見えないのでそれを見るようになっている。ただ、写真と図でわかるようにともかく細長い。

後の学生が何をしているかは全く見えない。また、学生が座り、荷物を置いたら学生の間に入って行くことは難しいと思えた。途中で抜けてもわからないし、ましてずっとさぼっていても監視不能である。協働作業で、さぼらない状況を作るしかないと、教室を見た時に考えた。この教室には教室管理システムも入っていたが筆者が他大学で利用しているものに比べると使い勝手が悪い上に不具合が出ることも多く、一部の機能しか用いなかったのではここでは詳細は述べない。

教室見学と登録人数の確認で、最大40人を前提として考えていた授業プランを多人数に対応させる必要に迫られた。それが授業開始2日前だった。表1を見るとわかるように初年度の登録者数が106名と最大である。なお、最初に断っておくがこれは筆者自身の感覚での「多人数」である。この拙論はあくまで「実践報告」であることを最初に断っておく。

幸いなのは、(株)朝日ネットのクラウド型の教育支援システム manaba (東洋大学では ToyoNet-Ace という名称)が全学導入されていることだった。manaba は、講義担当以前に海外と日本の学校を結ぶプロジェクトでも利用しており、他大学での講義でも活用していた。manaba を使えば、学生アンケート、掲示版、レポート提出、小テスト

等(この時点では出欠機能はまだなし)をすべてインターネット上で行うことが出来る。このシステムを最大限活用することがこの授業運営の成否を握ると考えた。担当科目は、教職課程の必修科目の一つ「教育方法研究」である。この科目には括弧書きで、「情報機器の活用を含む」とある。「含む」とあるが、情報機器活用は講義の重要要素である。従って、毎回の授業でコンピュータを利用する授業プランにしていた。多人数には驚いたが manaba の利用が授業プランを可能にすると考えた。講義の副題にある「情報機器を活用する」のは、学生よりまず教員側だった。

最初の授業で ToyoNet-Ace の説明と実習をして、「ToyoNet Ace は教育方法研究の授業に有効だと思いますか?」というアンケートをした。94%の学生が「はい」と回答していた(有効回答数 94 名)。自由記述では「多人数での授業なので、効率を上げるうえで便利なので有効だと思う。」「伝達事項が確実に伝わるので。」という回答が複数あり、ToyoNet-Ace(以下、LMS)の利用は学生も有効であると考えていることがわかった。また、やはりこの人数を学生も「多人数」だと思っているということがわかった。

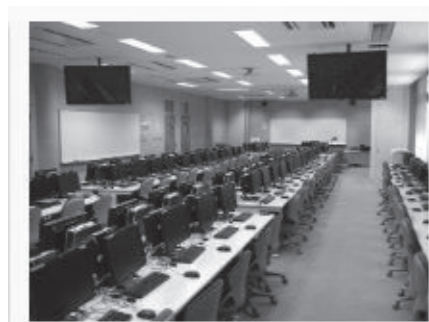
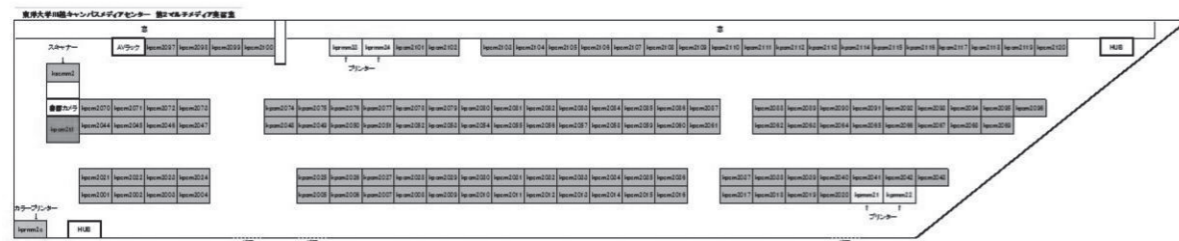


図 1 (上) 一番左が教卓。図の上が窓側、下が廊下側。窓側はテーブル一列。真ん中と廊下側は、テーブル 2 列で向かい合わせに座るようになっている。

写真 1 (左) 後方から撮った写真。右側が窓側。左側が廊下側。写真でも教卓が遠いのがわかる。

表 1 (下) 登録者推移(2011年から 2018 年)



## 2. 初年度からの工夫

初年度、予想外の多人数を前にしてどのような工夫をしたかを、運営方針とグループ活動、評価の仕方について述べる。

### 2.1 運営の方針を伝える

教室を見学した後に、問題点及び工夫が必要だと考えたのは次の点である。

- 1 コンピュータは横に並んで設置されており、教室が広くて後ろの学生は見えない
- 2 学生の間に入る事ができない
- 3 一人一人と話す事ができない
- 4 情報機器を使わせなければ授業にならない
- 5 シラバスの大幅な変更はできない
- 6 TA がいないので出席カード等で出欠をとるのは不可
- 7 コンピュータ教室には出欠をとることができるような管理システムは入っていない
- 8 一方的にならないような授業にしなければいけない

そこで次のようなことを考えた。

- 1 口頭では伝わらない可能性があるため、細かい指示に至るまでパワーポイントで提示する。プリントを紙で配布すると膨大な量になり時間もかかるので、LMS を使って PDF で配布する。
- 2 次の講義の前に LMS を使って授業準備や授業内容の連絡をする。
- 3 学生の細かい考えは LMS でのアンケートで把握する。
- 4 出欠は授業最初のアンケートやレポート提出を集計することで把握する。

初日。早めに教室に行って授業準備をしていたところ、次々と学生が入って来て、みるみる椅子はうまっていった。多人数の授業の経験がないので初めて見る光景だった。最終的には 106 名の登録となった。シラバスを考えた時の人数の 3 倍に迫る。

100 名余りを前に、最初の講義の時に上記の授業運営についてパワーポイントで伝えると共に、次の点も伝えた。

- 1 学生間に入って行く事は不可能なので細かい操作の指導はできない。コンピュータ操作については、近くにいる操作が得意な学生に聞く事。わからなければ前に質問に来る事。
- 2 マイクで怒鳴って私語をやめるように言うのは時間の無駄。上級生は下級生を指導する積もりで授業を受ける事。学校現場を体現していると考えること。

この二つの為にはグループ活動が重要であり、その構成が重要であると考えた。次の項で述べる。

### 2.2 グループ活動の工夫

15 回の講義の中心を占めているのはグループ活動である。

次の学習指導要領では、名称は主体的・対話的で深い学びという表現に変わったが、講義型ではないアクティブラーニングが授業の中心に位置するような変革を目指している。「対話的」とあるようにグループ活動での協働作業も重要である。そのように学校現場が変わろうとしている時に、アクティブラーニングの歴史や方法論を学ぶだけでは現場では役に立たない。教育方法論の授業そのものがアクティブラーニングとなり、自分達がアクティブラーニングを体験することで、学校現場に入った時に今度は指導者としてアクティブラーニングを実践することが出来るようになると考えて授業プランを作っていた。果たしてそれが 106 名を相手に実現出来るだろうかというのが初日の不安だった。

初年度はグループ構成で 3 つの工夫をした。

- 1 前述のように、学生には「上級生は下級生を指導する積もりで授業を受ける事。学校現場を体現していると考えること。」と伝えた。多人数をプラス要素として活用しようと考え、上級生の自覚を促す事を目的とし、上級生と下級生が組合わさるようにグループを作成した。

2 いろいろな学科、男女を組み合わせで構成するように工夫した。理工学部なので女子学生は4分の1程度と少ない。特定のグループに固まらないよう、各グループに1名ないし2名女子学生が入るようにした。

3 最初の授業時に、ICT 能力、協調力、統率力、コミュニケーション能力の自己評価アンケートを取り、偏ったグループにならないように構成した。特に ICT 能力の高い学生は分散するようにした。

初年度はこのような工夫をして、各グループ8名から10名で構成した。12グループになった。

初日は仲間通しで座ったのでざわざわしていたが、2回目以降は指示したグループで座らせることで、静かに授業を進める事ができるようになった。

また、授業内だけでなく、授業外でも LMS の掲示板(学生が自由に新しいスレッドを立てることができる)を利用してデータのやりとり、意見交換や打ち合わせを行うようにした。授業外でのグループ活動も促進して授業が活性化するようにした。

グループ分けをするとすぐにリーダー、サブリーダーを決め、課題に対してどのようなことを担当するかを決定させる。それを LMS の掲示板で共有させた。作業中および作業終了後にはグループでの貢献度や、具体的にどんな役割を果たしたかについてのアンケートを書かせた。必ず自己評価して自分の活動を意識させ、積極的にグループ活動に取り組むようにさせた。自己評価の意識の差はアンケート内容にも現れ、評価に反映させた

初年度は、自己紹介プレゼンテーション以外の大きな3つのテーマ毎にグループを変更したので、コミュニケーションを取る事が苦手な学生にとって、新しい仲間と共に共同で作業を進める事そのものが勉強になったと考えている。学生のアンケートにもそのような記述が見られた。「学びの共同体」を体験出来たと考えている。106名への対応では最良の策だったと考えている。しかし、あまりグループを変更すると互いの自己紹介から始まって時間がかかるという意見が学生の方からあり、翌年は72名と受

講者が減ったので、グループ変更は一度だけにした。それ以降、受講者が多くても基本的に変更は一度だけを原則にしている。

このような工夫の結果、多人数授業で LMS は有効で、学生の自主性を育て、経歴を見ることによって学生の理解の進捗具合を把握できることがわかった。一方、グループ活動は、体験を通してコミュニケーションの重要性を学ぶ機会となると共に、学生自身が自分の長所や短所を知り、自分の果たすべき役割を把握できることがわかった。

### 2.3 教職への考察アンケートと評価

学生にとっての大きな関心事である評価の妥当性について、特に多人数の場合、学生に納得させるのは重要である。

3点述べる。

まず、最初の講義の時にコンピュータ技術は評価の対象としないと説明した。この講義は、情報処理の授業ではなく、教育でどう情報処理をするとよいかを学ぶ授業であり、元々大きな差がある情報処理能力を評価するのは不公平であると伝えた。授業の参加度、学習度、グループでの貢献度を評価すると伝え、そのために細かく、アンケート、レポートを出させる事にしたのである。特にアンケートは重視した。毎回の授業の最後に授業の振り返りをアンケートの形で書かせ、授業全体を通して、教職についての考察ができるようにした。学生はアンケートの形だとたくさん記入する。口頭で質問してその場で答えを聞くより、いろいろな考えを引き出す事ができ、学生自身にとっても一人一人で考える機会になったのではないかと考えている。グラフにできるものについてはアンケート実施の時点で画面に表示しながら解説した。記述のアンケートについては、次の講義時にコメントした。この教職への考察アンケートの結果、総合的に学生の評価を出すことができたと考えている。

初年度、一名だけ成績の問い合わせがあった。出席していてもアンケートが未提出であれば評価は下がると教

務課を通して伝えた。そもそも出席点というのは文科省が認めていない。授業及び授業外でどのような活動をして考察したかを評価すると授業中に繰り返し替えてしていたので再度の問い合わせはなかった。2度しか欠席していない学生だった。

出席管理は、今は ToyoNet-Ace で簡単に出来るが最初の2年間はそのような機能がなく、アンケートを即座にグラフ表示する機能もなかった。その為に、ToyoNet-Ace も使いつつ、私が管理している e-Learning システム Terra(SSS 社)の方をアンケートでは多く使ってその場でグラフを表示して解説した。また、そのデータを吸い上げて Access で管理して出席を管理していた。

多人数だからと言って大雑把な成績をつけることはできない。参加度を重視すると伝えたが、100名を超えると出欠を正確につけることすら難しい。まして、毎回のアンケートは提出、未提出を把握するだけでも難しい。100名を越えると Excel での処理はなかなか難しいと考え、データベースソフトの Access で管理することにした。今から思うと Excel で管理出来たようにも思うが、100名を超えたデータの管理は Access で行うというような頭があったように思う。

2年目は受講者が72名と106名に比べて減ったので Excel での管理にした。さらに3年目は ToyoNet-Ace で出席管理が出来るようになったので、それ以降、自分の e-Learning システムは e-Learning 作成の実習だけで利用して ToyoNet-Ace ですべて管理している。

### 3. 特徴ある内容

本講義の特徴ある内容について述べる。

まず、本講義の目的は次のようにしている。現在に至るまで大筋は変わらない。

「教員の仕事の中で ICT 活用が果たす役割や有効性を理解し、自ら実践できるようにすることを目的とする。具体的には、プリント作成、成績処理、成績評価、生徒の動向調査、校務分掌の円滑な遂行、授業の活性化、これらすべてのための ICT 活用について学ぶ。

加えて、新しい教育の動き、協働学習、アクティブラーニングなどの教育方法を学ぶ。」

前述のように本講義は、情報技術を深く学ぶということは目的としていない。「情報機器の活用を含む」であり、あくまで教育現場で“必要な”ICT 活用技術の習得を目的とした。ICT が活用できれば、よりわかりやすい、効果的な授業が可能になる。また、雑務の時間を減らしてその時間を別の仕事に割り振ることができるようになる。学校現場で一番大切な、生徒に向き合う時間を作り出せる。それが一番の目的である。学生にはそのように説明し、講義を通してそれを“実感する”ことを目的とした。

シラバスを作成した時に、講義の大きな活動として次の5つを考えていた。学校現場では必須の活動を、大学での講義の中で擬似的に体験し、考察することが現場で役立つと考えていた。5以外は協働作業である。

- 1 自己紹介 PPT の作成、互いの評価
- 2 テスト作成、実施、採点、集計、分析、発表、互いの評価
- 3 アンケート作成、実施、集計、分析、発表、互いの評価
- 4 e-Learning システムを使ったアンケート作成、実施、集計、紙のアンケートとの比較
- 5 夜間中学について学ぶ

以下、それぞれについて説明する。

#### 3.1 自己紹介パワーポイント作成

自己紹介のパワーポイントを作成し、全員の前で発表するという事は重要だと考えた。作成、発表の際、次のことをいくつか盛り込むことを条件としていた。アピールが重要なポイントである。なお、情報処理の授業ではないのでパワーポイントの説明は基本的なものに留めている。

- 1 出身高校についてのアピール
- 2 特技、趣味についてのアピール
- 3 得意科目についてのアピール
- 4 なぜ教職を志したかのアピール
- 5 教職希望の強さのアピール
- 6 将来の希望についてのアピール

しかし、106名が全員を前にして発表する事は出来ない。一人3分でも5時間以上かかる。

初年度はいろいろと考えた結果、次の方法を取った。互いのインタビューをしてグループで一つPPTを作成して発表するという方式である。以下に示す。

- 1 発表はグループで一つ
- 2 まず2人で、指示された発表に盛り込む内容に沿って互いにインタビューする。インタビュー内容は提出させる。
- 3 次に4人のグループでPPTを作る。共通項を探すように指示する。
- 4 最後にグループ全体で、共通項をまとめる形でPPTを作成する。
- 5 全員の紹介をグループでプレゼンする。重要なのは「アピール」という点を強調する。

互いにインタビューすることで対話が生まれ、互いを知ることでコミュニケーションを深め、PPTを作成することで協働作業の練習となる。最後の発表でプレゼンテーションの能力を高める。という意図であった。学生はたいへん熱心に取り組んだが予想以上の時間がかかり、翌年度からは人数が少し減ったこともあってこの方式は初年度のみ実施した。今後、人数が多いときには試してみたいと思っている。

その後の基本的な方法は次の通りである。グループ人数は受講者数によって違うが、7名から8名の代表者が全体で発表するようにしている。

まず4人のグループ内で全員が発表して互いに評価する。一番評価が高かった学生を代表者とする。次に16名のグループとなって、その中で代表者4人がそれぞれ発表して、グループ全体の代表を一人決める。最後にその代表者達が全体で発表するという方式にした。この方式だと全員が自分のPPTを作り、少なくとも一回は発表することが出来る。また学生の評価が高い学生を知ることが出来る。

また初年度から継続しているのは互いの評価をExcelに入力して提出することである。特に初年度は12グループだったので他のグループの発表を聞いている時間が長

くなる。そこで発表を漫然と聞くことがないように、互いに評価し、配布したExcelの評価表に入力することにした。評価をするためにはよく聞かなければいけない。また、評価の際重要なのは、悪い面を見つけるのではなく、よい面を評価することだと指導した。

Excelの評価表は細かく項目を分けている。

- 1 技術点
- 2 時間配分
- 3 わかりやすさ
- 4 アピール度
- 5 プレゼン点
- 6 総合点の6項目である。5段階でつけるので満点は30点である。なお、後述するように現在はルーブリックで評価している。

### 3.2 テスト作成

授業最後の振り返りアンケートの「一番興味を持った項目」、「一番重要だと思った項目」では、テスト作成が毎年上位となる。初年度は果たして実施出来るだろうかとはじめたテスト作成だが、改善を重ねながら何とか毎年実施している。

基本的にはグループでテストを作成し、グループで交換してテストを受け、採点してその結果について分析、発表するというものである。

次のような指示を出す。

- 1 15-20問程度(A4一枚程度)で問題を作成する
- 2 必ず項目別に分けて集計する。事前にテスト分析について時間をかけて講義し、テストの得点の意味、項目別に作成することの重要性をよく理解させた後でテスト作成をしている。
- 3 模範解答及び解説は必ず作成し、採点基準を決める

また、以下を留意点として説明する

- 1 平均をどの位に設定するか?基本的には60点。
- 2 分布が正規分布になるように、ばらつきが出る難易度を考える。
- 3 設問の仕方を考える。例として、選択肢、穴埋め、自由記述の作問の仕方や留意点を説明する。

テストの材料はゲストスピーカーの講義である。初年度からゲストスピーカーを呼んでいる。初年度はカラー

コーディネーターの人に来て頂いた。ここ数年はフレンチ薬膳の方に来て頂いている。現在の専門の話と共に、二人とも起業して成功をおさめた人達なので、起業の経緯や苦労、学生へのアドバイスを講義の中心にするように頼んでいる。毎年、学生は興味深く聞いており、アンケートも良好である。3つ載せておく。学生の将来に繋がれば幸いだと考えている。坂井さんというのはゲストスピーカーの名前である。

「一つのことに囚われず、何がどうつながっていくかわからないのでいろいろなことに挑戦してみたいと思った。」

「どんなことでも興味を持ったら頂点を見ること、目指すこと、と言っていた坂井さんが実際に夢を実現させている姿を見て、自分も届く範囲ではなく、もっと大きな夢を持ちたいと思いました。今私は教員免許を取ろうとしていますが、やりたいことが決まっていません。公務員試験や測量士補、簿記など色々な方面の資格を取ることで将来の職業の選択肢を増やしていきたいです。」

ともかく全員が同じ話を聞き、それを元にテストを作成するというので、擬似的ではあるが、授業を受けてテストを受けるという形は、学校現場と同じである。問題作成、印刷、テスト実施、採点、分析、発表という流れである。

分析の発表で毎年出て来るのは、採点し始めてから部分点をどうするかなどをグループで相談して時間がかったという反省である。事前の問題作成の留意点で詳しく説明していても“実感”はないのだろう。自分達で体験して始めて“実感する”。

各グループのファイルを使って、その後の成績処理の演習を行い、偏差値の説明を行う。偏差値の理解も自分達が作成した試験だから実感出来ると考えている。あくまで、“実感する”がこの講義の中心である。学生の代表的な感想を一つ載せておく。

「問題作成の難しさをいやというほど思い知らされた。ひとつの答えを答えさせるためにそれ以外の答えの可能性をなくさなければならず、その文章の推敲が難しいと感じました。」

### 3.3 アンケート作成

学校現場では様々なアンケートが実施される。ネット上のアンケートシステムの利用も簡単になってきたが、学校では生徒や保護者、来訪者へのアンケートは紙での実施が大半である。集計作業も昔ながらの手作業である。多くの時間を要する上に、その後の報告書作成の為に、手作業の数値を新たにExcelで入力するという手間がかかる。学生の中には生徒会活動や大学でのサークル活動などで手作業でのアンケートに関わり、苦労を理解している学生もいた。

そこでこの授業では、フリーで使えるExcelのマクロを利用した、アンケート項目を入れるだけでアンケート用紙、入力表をマクロが作成する。その入力表にアンケート結果を入力すると、集計もマクロが行う。毎年、学生にはこのマクロそのものが好評である。このマクロは無料公開されている。初めて授業で使う時に作成者に連絡を取り、授業での利用を快諾してもらった。許諾のやり取りの時に、実はこの作成者は東洋大学理工学部建築学科の卒業生だという事がわかり、授業の時に毎回紹介している。

アンケート作成に関しては次のように指示を出している。グループでの作業である。

- 1 15項目程度のアンケートを作成する
- 2 最低30人には答えてもらう。多ければ多いほどデータとしてはよい
- 3 アンケートの目的、項目、実施方法を検討してアンケートを作成。
- 4 大事なのは目的、内容、予想。
- 5 結果についてPPTにまとめてグループでプレゼンテーション

最後のプレゼンテーションでは、グラフを貼り付けるなどしてわかりやすいPPTを作成している。また毎年、自己紹介プレゼンテーションやテスト分析プレゼンテーションは時間内で終了するが、このアンケート分析プレゼンテーションは長い。発表したいことがたくさんあるようである。

なお、今年初の試みをした。アンケートを授業外で取らせても結局は自分の周りで取るだけであるし、集計作業にばらつきが出て授業運営がスムーズにいかないということが続いたので授業の中で、アンケートを実施する方法に変えてみた。

テストの時と同じように、指定した2つのグループに対して授業中にアンケートを取ることにしたのである。その場で回収して、集計する。自分達もアンケートに回答するので3グループ分のアンケートが回収出来る。授業内でのアンケート実施なので、確実にアンケートが取れ、時間の予定もたてやすくなった。授業外での実施に比べて回収数は減ってしまうが、アンケート実施の体験としては十分であると考えている。

学生の代表的な感想を一つ載せておく。

「アンケートもテスト作成と同じくその目的や対象について最初に明確に決定することが必要だと学んだ。また、その集計の際にすでに作られているエクセルを利用することでとても早く集計することができた。」

### 3.4 e-Learning システムの利用

前述の Terra という e-Learning システムは筆者が管理しているシステムなので、自由に利用者登録が出来、さらには権限を一時的に問題作成者に変更して問題やアンケートを作成させることも出来る。

紙でのアンケート作成を行ってその処理も体験した後に e-Learning 上で同じ作業をして、その利便性について実感することを目的としている。

紙で実施したのと同じアンケートを e-Learning 上に移行し、クラス内で回答してその集計結果やグラフが画面に表示されるのを確認させている。両方のアンケートを比較した代表的な感想を2つ載せておく。

「ネットだと回答するのも集計するのも場所と時間を取らずにできるので非常によいのが利点。紙だと作成、配布、回収、集計が大変なのが欠点。」

「集計した結果が一目でわかって便利だと思った。」

また、下記のような感想もあった。紙とネットの違いを

指摘した興味深い感想である。考えていく必要があるだろう。

「ネットでのアンケートは回答者への負担や集計の手間があまりかからないが、ふざけた回答が比較的多い気がする。」

また、終了後に、中等教育で e-Learning システムが有効かどうかという問いと共に、実際中等教育の現場で使えるようになるかという問いに回答させている。毎回、この二つの回答は真逆になる。中等教育で有効であると考えた学生が大半であるが、普及の可否については否定的である。多くの学生が指摘するのは教員の力量の問題、予算の問題である。

ICT 活用全体についての、肯定的な意見と否定的な意見を載せておく。

肯定的な意見

「紙媒体だけでは時間がかかる事が ICT 活用をする事によって短縮できたり、より工夫した授業を行う事が出来たり等、生徒によりよい学習の場を与える事が出来るのではないかと考える。」

「これからの授業に取り入れるべきものであり、まずは自分達が生徒の前で戸惑わないように、学んでおく必要がある。」

否定的な意見

「有効であると考え。しかし、教師の活用における技術が問われることが今後の課題であると推測される。」

「電子黒板やテレビ電話、パソコンなどの電子機器によって授業を進めていけば、効率が上がりかなり需要はあると思うが費用などを考えるとまだ踏み切れないという学校が多いのかなと考えた。」

### 3.5 夜間中学について考える(DVD)

「2017年に施行された「教育機会確保法」に基づき、各県に公立の夜間中学を最低1校は設置するという目標が示された。引きこもりや不登校対策が主目的だが、全国の夜間中学の生徒は約7割が最近日本に来た外国人。(日本経済新聞 2019年1月28日朝刊)」と新聞記事に

ある夜間中学だが、ここに書かれている引きこもり、不登校、外国人の他に、中学生の年齢の時に学校に通うことが出来なかった高齢者も通っている。そのような夜間中学を取り上げた映画「こんばんは(森康之監督、2003年制作)」を最後の2コマを使って見ている。

「学ぼうという意欲のある生徒に教える」という教育の原点を掴んでほしいというのが一番の趣旨である。映画では国語の授業が二つ大きく取り上げられているが、常に生徒に発信させる授業をアクティブラーニングであると理解する学生が多くいる。

学生の代表的な感想を二つ載せておく。

「現代の学習者における様々な「意欲」「発展・応用・活用能力」が授業で養われる環境であったと感じた。」

「一番興味を持った項目は夜間中学についてである。私は中学時代に不登校を経験しており、高等学校も通信制の学校を選んだ。当時は同級生に比べて知識量は少なかつたし、友達やクラスメートといった、仲間と呼べる繋がりが点は今でも心の中で引っかかっている。いじめや不登校などはずっと問題とされているが、あまり改善されていないように感じる。不登校の生徒 = やる気のない生徒ではない。教育を受けたいと思っている生徒に、教育の機会を与えたいと考える。夜間中学や定時制の学校などが、全国的に普及していくことを望む。」

## 4. 全体の改善

これまで述べてきた以外の改善について2点記す。

### 4.1 グループ構成の工夫

前述のように、当初はこちらでグループ構成を決め、それがよい結果に繋がっていたと考えているが、学生の ICT 能力も年々向上してきているので現在は違う方法でグループ分けをしている。対話を進め、コミュニケーション力を高め、協働作業を活性化するという意図は初年度と同様である。

初めて一緒になったクラスを活性化するのに使うグループ活動の導入方法「ハッピーバースデーチェーン」である。

口はきかず、手振りだけで、自分達の誕生日順に並ぶというものである。

試行錯誤を経て現在は次のようにしている。

全員が座った状態でやり方を示す。開始したら、無言で立ち上がり、手振りだけで誕生日順に並ぶと指示する。その際、小学生だと1分で出来る、大学生でも2分を切れると思うと目標時間を指示する。

毎年、こちらが驚くほど手際よく並ぶ。2分かかった事はない。小学生なみに1分のこともある。

並び終わったら、全員に大きな声で自分の誕生日を言わせて正しく並んでいるかどうかを確認する。一人二人間違いが出るのは愛嬌である。恥ずかしそうに順番を入れ替える。ここで自分の誕生日を大きな声で言うのは意味がある。大学生はなかなか大きな声で発言しない。特に最初の授業である。無言のまま座っていれば授業が終了すると思っている学生は多いだろう。自分の誕生日であっても大きな声で言うのは意義がある。これは筆者がカウンセリングの研修会で学び、応用している手法である。

次に1番から8番まで番号を言わせて、グループ分けをする。これで4人グループとその倍の8人グループが出来上がる。

そこでまだ座らない。まずは隣同士で自己紹介をさせる。ただの自己紹介だとすぐに終わってしまうので互いの共通項を探させて全体で発表させる。次は4人グループでの話合いで、同じくグループの共通項を探させる。これも発表させる。最後は8人グループにして同様のことをさせる。

ここで初めてグループ毎に席に座らせる。一人一人が何度も発言し、グループの共通項を探すという協働作業をしているので、その後の話し合いや協働作業などスムーズに進む。授業の目的や意図も一挙に理解することが出来ると考えている。

今年度は授業評価のアンケートに授業の導入を評価する自由記述があり、たいへんありがたかった。

「一番最初に行った生徒全員でおこなったレクリエーションがその後の活動を円満に進めることができたと思う。」

今後この方法は改善しながら進めていきたいと考えている。

## 4.2 ルーブリック評価

前述のように発表を聞くときは必ず Excel で評価をさせて提出させていた。「評価すること」をこちらで「評価する」と説明した。評価は自分に力がないと出来ない。いい加減に聞いていると正しい評価は出来ない。教員はその評価を評価すると説明した。学生達は真剣に得点をつけるし、自分がそれによって評価されるということがわかってるので馴れ合い的な評価はしない。寧ろ、教員より学生同志の評価の方が厳しい。要は教員の持つて行き方であろう。

4年目から、この評価をルーブリックに変更した。中教審でルーブリックが論議されていたこともあって導入した。その際、ルーブリックの解説をして理論だけを学んでも仕方ないと考えた。自らルーブリックで互いを評価することに慣れれば学校現場でも自分でルーブリックの表を作り、生徒の評価をすることが出来るだろうと考えたのである。

ルーブリックは、このプレゼンテーションの評価だけでなく、課題として出すレポートでもすべて事前に示し、それに沿って採点すると伝えてある。レポートが書きやすくなったという感想があった。

## 5. まとめ

コンピュータを活用した「教育方法論」の8年間の試行錯誤について報告した。教員を目指す学生達が学校現場に行った時に少しでも生徒に向き合う時間を取ることに繋がる ICT 活用の教育方法を学ばせてきた積みりである。多人数に戸惑ったが、それ以降8年間続けられているということは、初年度の最多人数(106名)での工夫が大きかったのではないかと考えている。学生達の要望に応じながら、毎年何らかの改善をしていると自負している。

今年は、8年目にして初めて、文学部の授業評価アンケートの自由記述で「半年間ありがとうございました。」と

いう感想を貰うことが出来た。高校教員の時は授業終了時の感謝のことばは珍しくなかったが大学ではなかなかこのようなことばを貰わなかった。さらに、理工学部でも、「この授業は将来的にも役に立つとても素晴らしい授業でした。教員に必要なPCスキルを学ぶことだけではなく、教育に関する情報を知ることができたのでためになりました。ここで得た技術をこの先に生かしていきたいです。」と、こちらの意図を理解してくれた回答があった。大学の実施する授業評価アンケートでの記述には本音が書かれていると考えてよいのではないだろうか。

このような回答を励みにさらによりよい講義を目指していきたいと考えている。

## 参考文献

- 1) 佐藤学(2015)『専門家として教師を育てる』岩波書店
- 2) 株式会社朝日ネットホームページ  
<https://manaba.jp/products/>(2019年2月13日閲覧)
- 3) 高等学校学習指導要領  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661\\_6\\_1\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf)  
(2019年2月17日閲覧)
- 4) 東洋大学ホームページ  
[https://www.toyo.ac.jp/room/detail\\_j/c/kawagoe/b/50/f/3F/r/2MM/](https://www.toyo.ac.jp/room/detail_j/c/kawagoe/b/50/f/3F/r/2MM/)(2019年2月12日閲覧)
- 5) 日本経済新聞(2019年1月28日朝刊)
- 6) 森康之(2003)『こんばんは』「こんばんは」全国上映普及委員会
- 7) 山崎吉朗(2011)「情報機器活用を目的とした多人数授業の授業設計」『日本教育工学会全国大会論文集』681-682
- 8) 山崎吉朗(2013)「グループ活動を中心に ICT を活用した多人数授業の授業設計」『日本教育工学会全国大会論文集』673-674